

エンド ロール

愛、アムール

美しくも残酷な献身

老いた夫婦の、老いととの格闘の物語である。妻はある経験から病院嫌いになっていて、どんなに体が弱っても入院だけはさせないでほしいと夫に言う。夫はそれを承知して、あくまで自分が介護すると誓う。そしてある日、妻に認知症の症状が現れて進行するが、養老施設に入るのは考えず、通いの介護人は雇っても扱いが乱暴だと解雇して、夫はひとりですべてをこなす。それは美しい理想的な愛のありかたを示しているようであるのだが、はたしてそうなのだろうか……。

パリの立派なアパルトマンに住む老夫婦の、本当に仲のいい、幸せそのものの様子からはじまって、徐々に進行する介護の難しさ困難さが、一点一点をゆるがせにしない丁寧さで描かれてゆく。その進行は息づまるようだ。

演じるのは夫役のジャンレイ・トランティニャンと妻役のエマニュエル・リバ。ともに若い頃は素敵なスターだった。とくにリバは、名作「二十四時間の情事」で広島原爆と自身の戦時中の体験に深く思いをはせる理知的な女性を演じていたことが忘れ難い。2人は共に美しく老いて、趣味のいい室内装飾や調度と見事に調和した風格豊かな日常生活を演じている。

脚本と監督はミヒャエル・ハネケ。この作品で彼はカンヌ映画祭の最高賞パルムドールの2回目を受賞している。それだけの見事な完成度の高さのある映画である。

しかしこれは単純に夫婦の愛を賛美している映画ではない。2人の愛は素敵だが、無理があり、無理を通そうとして破局を招くことになる。そこが怖いほ



ど厳粛でそして残酷だ。フランス、ドイツ、オーストリアの合作映画である。高齢化社会の厳

しさは日本だけではない。
(佐藤忠男・映画評論家)
9日から全国で公開。